

障害とパフォーミング・アーツ研究会〈第4回〉議事録

日時：平成28年10月11日（火）14：00～17：00

会場：アーツカウンシル東京 大会議室

内容：ロンドン UNLIMITED2016 視察報告、意見交換

参加者（順不同）：特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（廣川理事長、萩原副理事長）、スロームーブメント実行委員会（栗栖実行委員長、秋元）、日本ろう者劇団／社会福祉法人トット基金（井崎代表代行、小池）、サインアートプロジェクト・アジア（大橋代表）、特定非営利活動法人シニア演劇ネットワーク（遠藤）、特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク（小川）、クリエイティブ・アート実行委員会（伊地知）、劇団山の手事情社／NPO 法人ニコちゃんの会（倉品）、DDD Project（田中）

進行役：吉野さつき（愛知大学文学部メディア芸術専攻准教授）

オブザーバー（順不同）：森田かずよ（女優・ダンサー、CONVEY 主宰、NPO 法人ピースポットワンフォー理事長）、澤藤歩（KAAT 神奈川芸術劇場）、出口マミ（東京芸術劇場事業企画課事業第一係長）、松岡智子（東京芸術劇場事業企画課事業調整係）

アーツカウンシル東京出席者：荒田企画室長、杉谷企画助成課長、石綿オリンピック・パラリンピック文化戦略担当課長、角南オリンピック・パラリンピック文化戦略担当係長、佐野プログラム担当係長、小野寺企画担当係長

1. 参加者紹介

伊地知：クリエイティブ・アート実行委員会という任意団体の事務局長をしています。

25～26年前から、障害のある人とない人が一緒に活動することで生まれる表現の可能性を探りたいと、美術からパフォーミング・アーツまで幅広く表現活動をしています。

インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響の活動もその一つです。

小池：社会福祉法人トット基金、日本ろう者劇団の事務局長兼劇団制作の小池紀子です。昨日、今年度第2期の芸術文化による社会支援助成をいただく公演を、シアターXで行いました。

井崎：同じく日本ろう者劇団の代表代理の井崎です。

萩原：NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの副理事長の萩原です。

廣川：同じくシアター・アクセシビリティ・ネットワークの理事長の廣川です。視覚、聴覚の障害あるなしにかかわらず、全ての人とともに演劇を楽しむことを目指して活動しています。

倉品：山の手事情社という劇団の俳優と演出をやっております倉品淳子です。昨日、NPO法人ニコちゃんの会の主催で大阪ツアーを行いました。障害のある方と、シニアの女性と一緒に芝居をつくっています。

遠藤：NPO法人シニア演劇ネットワーク副理事の遠藤いづみです。代表は鯨エマです。かんじゅく座という65歳以上のシニアの方々を集めた公演を毎年1回、ゴールデンウィークに行く他、各地域で隔年で全国シニア演劇大会を開催しています。去年が仙台、来年は福岡で、全国のシニアの劇団の人たちと公演を行います。

出口：東京芸術劇場の事業企画課事業第一係でコンサートホール担当係長の出口です。4月からは人材育成担当を兼務しています。

松岡：同じく東京芸術劇場の松岡と申します。鑑賞支援、鑑賞のサポートを担当しています。実際の表現のほうにはまだ手をつけられていない状況です。

石綿：アーツカウンシル東京オリンピック文化戦略担当課長の石綿です。オリンピックに向け、この分野でどのようなサポートができるか検討していきたいと考えています。

森田：大阪からスカイプで参加させていただいております、森田かずよです。

角南：アーツカウンシル東京オリンピック・パラリンピック文化戦略担当係長の角南です。文化プログラムの都市型支援の形を皆さんと一緒に見つけられればと思っています。

秋元：特定非営利活動法人スローレーベルの事務局スタッフ秋元千枝です。

栗栖：同じくスローレーベルでスロームーブメントの総合演出をしています栗栖です。

澤藤：KAT T 神奈川芸術劇場の澤藤です。アンリミテッドのフェスティバルで佐野さんとご一緒させていただきました。

田中：田中みゆきです。私はフリーランスのキュレーターですが、ここ数年、障害にか

かわるパフォーマンス、展覧会、書籍などもつくっています。佐野さんとロンドンで一緒にさせていただいたご縁で、今回お誘いいただきました。

小川：シアタープランニングネットワークの小川です。ホスピタルシアタープロジェクトという、福祉施設を巡演して障害のある方に演劇を鑑賞していただく活動をしています。

杉谷：アーツカウンシル東京の企画助成課長の杉谷です。

荒田：企画室長の荒田です。4月に東京都から出向してアーツカウンシル東京に来ました。

今野：アーツカウンシル東京の今野です。助成事業の舞踊分野を担当しています。社会支援助成の立ち上げ準備のための調査の一環で、2年前のアンリミテッド・フェスティバルを視察しました。

2. UNLIMITED（アンリミテッド）2016 視察報告（佐野）

（1）アンリミテッドの概要

佐野：ロンドンで9月に開催されたアンリミテッド・フェスティバルの視察報告をさせていただきます。1週間程度の短い滞在で、どこまでイギリスでの事情を理解できたのか心もとない面もありますが、私なりに理解した範囲でご報告します。

まず、アンリミテッドとは、2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック開催を受けて、障害のあるアーティストの活動を支援することを目的に、2009年から2012年にかけて実施されたプロジェクトです。後に「第1ラウンド」と呼ばれます。具体的には、以下4つの包括的な支援が行われました。①障害のあるアーティストによる作品制作のための資金助成と制作委嘱、②制作に必要となるアーティスト、プロデューサー、アクセスワーカー等人材の育成、③制作された作品の上映や展示のためのフェスティバル開催、④制作委嘱された作品の国際展開です。

第1ラウンドの予算300万ポンドは、オリンピックの宝くじに加え、アーツカウンシル・イングランド、アーツカウンシル・ウェールズ、ブリティッシュ・カウンシル等が拠出しました。今のレートで換算すると4億2,000万ですが、当時のレートではこの倍近くです。成果として、「ロンドン2012カルチュラル・オリンピアド」、いわゆるオリンピック文化プログラムの主要プログラムの1つとして、障害のあるアーティストによる29の新作が発表されました。

この写真は、スー・オースティンというアーティストです。スキューバダイビングの経験がない彼女が、車椅子を水中に沈めてパフォーマンスをすることにチャレンジしたいとアンリミテッドに応募し、採択されて実現しました。このパフォーマンスがアップされたウェブサイトはこれまでに2,400万ビューがあったそうで、大きなインパクトを与えて、障害者に対する見方を変えたと言われています。

ただし、アンリミテッドによって障害のあるアーティストの活躍が一気に伸びたのではなく、英国では1970年代後半から障害者の人権運動が盛んで、同時に障害者芸術のムーブメントも相当育ち、80年代には既にある程度の数の、重要な意義ある活動をするアーティストが存在していたという背景があるそうです。

2012年のアンリミテッド・フェスティバルの成功を受け、アーツカウンシル・イングランドやブリティッシュ・カウンシルがレガシーとしてプログラムを継続していくことになり、2013年から2016年に第2ラウンドが行われました。更に、2017年から2020年に第3ラウンドのアンリミテッドを継続することが、つい先日決まったそうです。

第2ラウンド以降の目的は、障害のあるアーティストの活動を一般の文化セクター、いわゆる通常のアーツシーンに売り込み、新しい観客に作品を届け、障害のある人に対する見方や認識を変化させることです。そのために、障害のあるアーティストにコミッション、つまり作品制作の委嘱をして、アンリミテッド・フェスティバルや英国内外のさまざまな場で作品を発表する活動が続けられています。

2014年に第2回のフェスティバルが開催され、今回が第3回フェスティバルになります。予算は、第2ラウンドが150万ポンドでした。第3ラウンドは少し増えて180万ポンドに決まったということです。

アンリミテッド・プログラムはアーティストに作品の制作を委嘱するものですが、現在は3つのカテゴリーが設けられています。①「メイン」：プロフェッショナルにエスタブリッシュされたアーティストまたはカンパニーに対する支援、②「インターナショナル・コミッション」：これもプロフェッショナルにエスタブリッシュされたアーティストまたはカンパニーによる、国外の障害のあるアーティストとのコラボレーションとの国際共同制作で、助成金額が最大です、③「エマージング」：新進・若手アーティストに対して作品制作または最終的な成果を必ずしも問わない、プロセス重視のプロジェクト支援の3つです。「プロフェッショナルにエスタブリッシュされたアーティスト」

とは、作品が広く社会で知られていて、確かな批評や反応を受けているという定義だそうです。必ずしも経済的に自立しているということではなく、アーティストとして作品を発表し、それに対してメディアや観客から相当の反応を得ているということになります。

委嘱を受けて、いきなり作品を制作するのではなく、研究開発からスタートすることもできます。そこで得た成果、手ごたえを基にして作品制作につなげていくことができるのです。障害のあるアーティストが主導していること、アーティストがクリエイティブ・コントロールを持っていることが絶対条件です。資金提供だけでなく、アーティストのマインドづくりやリーダーシップのトレーニングなどの側面支援も行われます。

(2) アンリミテッド・フェスティバルの概要

2016年のアンリミテッド・フェスティバルは、ロンドンのサウスバンク・センターという文化施設で行われました。グラスゴーでも別バージョンのアンリミテッド・フェスティバルが開催されましたが、今回はロンドンのみ視察を行いました。

ブリティッシュ・カウンシルの視察プログラムに、KAT T神奈川芸術劇場の制作の澤藤さん、インディペンデント・キュレーターの田中みゆきさん、豊島区あうるすぽっとの制作の岸本さん、国際交流基金の西山さん、日本財団のソーシャルイノベーション本部の溝垣さん、川崎市の市民文化振興室の白石さんと一緒に、日本から計7名で参加しました。ブリティッシュ・カウンシルの東アジア各国のオフィスが視察者を募って、計40名のデレゲーションでした。

(スライドを見ながら)これが、2012年からアンリミテッド・フェスティバルの会場となっているサウスバンク・センターです。ロンドンのテムズ川の南側、サウスバンク地域にある、英国を代表する複合文化施設です。第2次世界大戦からの復興を目的とした英国博覧会のために1951年に建てられた、歴史ある施設です。クラシック音楽、ロック、ジャズ、ワールドミュージック、演劇、ダンス、美術など幅広いプログラムを実施しています。ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団等、4つのオーケストラが本拠地にしており、英国芸術の殿堂とも言われます。イギリスに限らずヨーロッパの劇場にはフェスティバル文化が定着しています。アンリミテッドは、サウスバンク・センターで年間40件開催されるフェスティバルの1つという位置づけです。

サウスバンク地域はアートの集積エリアで、サウスバンク・センター以外にもシェイクスピア・グローブ座、ナショナル・シアターなど演劇専門の劇場や、現代アートのテート・モダンなど、さまざまな文化施設がテムズ川沿いに並んでいます。ロンドン・アイという大観覧車が2000年のミレニアム事業でつくられた観光地でもあるので、周辺は人で賑わって、人々の憩いの場になっています。サウスバンク併設のカフェなど、パブリックスペースの写真ですが、日曜日は家族連れで出かけてくる人も多いようです。

これは施設入り口のメッセージです。「世界のフェスティバル！ ウェルカム・トゥ・サウスバンク・センター」と書かれています。「この劇場は誰でもウェルカム、ここで世界の文化と触れられる」と積極的に発信しているのです。カフェテリアには平日でもこのように人が集まっています。右下の写真にスーツ姿の男性が写っていますが、仕事帰りに劇場に集まって、ビールやコーヒーを飲んで周りの人とリラックスした時間を持つような環境があるということに、まずは非常に感銘を受けました。

この顔写真のジュード・ケリー氏が、2005年からサウスバンク・センターの芸術監督です。ロンドンオリンピック・パラリンピックの初代文化教育委員会の最高責任者も務めました。2012年を前に退きましたが、イギリスの文化政策の大御所の1人です。国際交流基金が制作したインタビューサイトで、彼女はこんなことを言っています。「サウスバンク・センターを単なるクラシック音楽や美術の施設というより、人々が集まり、互いのアイデアを賞賛できる場にしたい。英国博覧会の基本方針に戻って、人間性を賞賛するフェスティバルの場に変えたい。ハイアートを有難がって鑑賞するだけの場ではなく、人々に開かれた、芸術を通して人間性が賞賛される場所にしていきたい」。もう一つ印象深いこととして、彼女はもともと演出家ですが、「劇場で上演される物語と、ホワイエや客席に集まっている一人一人の物語は、等価である。だから、自分はいずれを同じように扱っていきたい。」とも語っています。2012年のアンリミテッド・フェスティバルはサウスバンク・センター側からオファーがあって開催したそうですが、こういう人物が芸術監督を務めていることも背景にあるのだろうと感じられました。

(3) イギリスの障害のある俳優の活動状況

次に、イギリスの障害のある俳優の活動状況についてお話しします。ナショナル・シアターでブレヒトの『三文オペラ』を観たのですが、メッキー・メッサーの子分、5人のストリートギャングの1人であるウォルター役を、脳性麻痺の車椅子の俳優が演じて

いました。英国には障害があるなしに関係なく加盟する俳優組合があつて、俳優たちが団結して、賃金、労働条件、労働環境の整備などを劇場と交渉したりメディアにアピールしたりするそうです。エクイティという組織です。その中に障害者委員会というのがあつて、障害のある俳優の権利獲得と活動の場の拡大のための交渉をしているそうです。そういう組織があるからこそ、また長年、障害のあるアーティストが活動してきた背景があるからこそそのキャスティングだと思い、驚きました。日本では今、障害のある役をなぜ障害者、当事者が演じないのかと問題提起されたりしていますが、英国ではすでにそんな段階を越えて、演出として障害のあるアーティストがキャスティングされるというところまで進んでいることがわかりました。

しかし、これは必ずしも当事者の闘い、交渉の成果だけではなく、アーツカウンシル・イングランドのダイバーシティ戦略も大きく影響しているようです。ナショナル・シアターは活動資金の6割をアーツカウンシル・イングランドから受けています。アーツカウンシル・イングランドは「優れた芸術文化を全ての人々に」というミッションを掲げ、それを達成するために、2010年から2020年までの10年間で実現すべき5つの戦略的目標を掲げています。①エクセレンス、②フォー・エブリワン、③レジリエンスとサステナビリティ（弾力性と継続性）、④ダイバーシティとスキルズ、⑤チルドレンとヤング・ピープルの5つです。その4つ目のゴールとして「美術館、博物館、図書館等や、リーダーシップを発揮して働く人々が、多様性を保障するための適切な技術を持つこと」を掲げています。このゴールにひもづいて、劇場での多様性、障害者の芸術活動の促進等が助成事業や具体的なプロジェクトとして実施されているそうです。こうしたアーツカウンシル・イングランドの方針が強く影響しているということです。

(4) アンリミテッド・フェスティバルにおけるパフォーマンス・アーツのプログラム

今年のプログラムのハンドブックです。黄色い背景に黒い大きめの字で印刷されているデザインが目を引きます。これは、弱視の方が一番見やすい色彩とレイアウトなのだそうです。今年の看板演目の『安楽死ミュージカル』の作・出演は、リズ・カーという車椅子に乗っている女性です。俳優、コメディアン、作家、障害者の権利活動家として活躍する知名度の高い人です。ハンドブックには作品についてのみ書かれていて、障害には敢えて触れない方針だそうなので、彼女の障害について具体的にはわかりません。作品のテーマは、末期の病人や障害者の安楽死の合法化をめぐる英国の時事問題です。

スイス、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、アメリカ合衆国の幾つかの州ではすでに安楽死が合法化されていますが、英国の国会では、2015年9月11日に安楽死を合法化する法案が圧倒的多数で否決されました。ただ、その前に行われた世論調査では8割の英国国民が、末期の病人、障害者等の安楽死は人道にかなった選択であると答えていたので、障害のある方々の間では、合法化されるのではとかなり危機感が募っていたそうです。こうした時事的な問題を敢えて、風刺に満ちたユーモラスなミュージカル作品に仕立てました。外国人の安楽死も受け入れているスイスへの安楽死ツアーに、リズが参加して、死に行く人たちをつぶさに観察しシニカルにレポートする、そこに歌と踊りが挿入されるといった作品でした。客席から撮った写真ですが、ご覧のようなボードビルのようなシーンもあればドラマチックなバラードも挿入される完成度の高い作品で、終演後は拍手喝采でした。リサーチやワーク・イン・プログレスを重ねて5年をかけて作ったそうです。

リズはサウスバンクの広報紙のインタビューで、「障害のようなダークでタブーとされる問題を敢えて笑うことが、自分にとっては重要だ。身体障害の世界に生きる自分には、障害はダークなことでもタブーでもない。人間にとっての全ての厄介、難しい問題を笑ってきた自分にとって、この作品は人生そのものだ」と答えています。

批評を受けることがプロフェッショナルでエスタブリッシュされたアーティストの定義だと冒頭でお伝えしましたが、この公演の批評記事が「ザ・ステージ」という舞台専門のサイトに出ました。「ショーを率いるリズ・カーは大変な才能の持ち主で、たっぷりのミュージカルという形式で、語りにくい複雑な問題を和らげつつ、心に訴える熱情あふれる作品にした。ロングラン上演に値する作品。但し、音楽が録音で、音響や照明等技術面での粗さが気になる」ということで、星3つでした。このように、障害のあるアーティストの作品もちゃんとした批評を受けています。

次に、クレア・カニンガムとジェス・カーティスの『ザ・ウェイ・ユー・ルック（アット・ミー）トゥナイト』（今夜のあなたの（私への）見方）という作品です。クレアは、下半身が少し不自由で杖を使う女性ダンサーです。英国を代表するアーティストとして、国際的にも活躍しています。アンリミテッド2012では、カンドゥーコと共同制作をしました。今回は、人が世界をどのように知覚しているか、その見方の習慣や認識を疑うことをテーマにした作品でした。クレアは、ダンスでなくムーブメントと呼びますが、ムーブメントを始めたのは2008年頃だそうです。2012年のアンリミテ

ッドで作品を発表する僅か4年前にトレーニングを開始したのです。当時ムーブメントを指導したのが、アメリカ人ダンサー・振付家である共演者、ジェス・カーティスでした。

椅子が点々と置かれた舞台での、クレアとジェスのダンス・ムーブメント、パフォーマンスを間近で見ることができました。「これは社会的な彫刻作品、2人のパフォーマーと観客のための感覚の旅である」ということで、人間が世界を知覚する行為や習慣に対する疑問について、舞台上でクレアとジェスが対話しながら、時に観客に語りかけながら進行するパフォーマンスに、音楽と映像を用いた知的な作品です。アルヴァ・ノエ博士という認知哲学の専門家をコンサルタントに招いて、サンフランシスコに長期滞在して作り、2015年12月のアメリカでのプレビュー公演を経て、今回のロンドンでの本公演に至ったそうです。サンフランシスコでのトレーラーをご覧ください。(映像)

杖をついて下半身を浮かせて動く彼女独特のメソッドで、そのときの下半身の浮遊感や動きの滑らかさに目を見張らされる、美しいムーブメントでした。

次に見たのがカンドゥーコ・ダンス・カンパニーの「ユー・アンド・アイ・ノウ」(あなたと私は知っている)です。カンドゥーコは1991年にアダム・ベンジャミン、セレステ・ダンデガーによって設立された障害のある、そして障害のないダンサーのプロフェッショナルな、インテグレイテッド・ダンス・カンパニーの草分けとされるグループです。愛をテーマにした男女のデュエット作品で、15分間と短いものです。(映像)

次に、今年の注目作品とされるシーラ・ヒルの『ヒム』(彼を)という作品、ティム・バーロウという高齢の男性の一人芝居でした。シーラ・ヒルはもともと作家として活動していましたが、30年前に事故で重傷を負って、10年間の入院生活を送った後に作家活動を再開したそうです。出演者のティム・バーロウは、20代に兵士として戦場にいたとき耳の側で銃が撃たれて、耳が聞こえなくなり、人口内耳をつけて俳優活動をしています。兵士時代の自叙伝的な物語を一人芝居にした作品が高い評価を受けてワールドツアーをしました。サイモン・バクマーニーが主宰する劇団「コンプリシテ」のメンバーとしても活躍してきた俳優だそうです。

シーラとティムの2人は20年来の友人で、実際に2人の間で交わされた、子ども時代の記憶、老化、演劇に関する会話をもとにしたドキュメンタリー的なモノログ作品です。シンプルな舞台の下手に俳優が座って詩的なせりふを語り、センターのスクリーンに映像作家の作品が映し出されます。上手にはウッドベース奏者。1時間ほどのシッ

クな作品でした。

次が、ジェス・トムの「スタンドアップ・シットダウン・ロールオーバー」（立って、座って、転がれ）です。ジェス・トムはトゥレット症候群、いわゆるチックがあって、1日に1万6,000回「ビスケット」と言わずにはいられない神経作用をコントロールできません。台本を書いてもそのとおりに演じることは不可能という俳優です。作家、コメディアン、半分ふざけて資金調達の専門家、パートタイム・スーパーヒーローと自称しています。自分の症状を逆手にとってトゥレット・ヒーローというキャラをつくり、「ビスケットの国」という作品を2012年に発表しましたが、それは大人気で追加公演も行ったそうです。今回は、ジェスの初めての一人芝居で、まだ本公演ではなく初期のワーク・イン・プログレスでした。（映像）これからどんなふうに作品化されていくのか興味深いところでした。

2013年から2016年の第2ラウンドのスナップショット、簡易な評価報告書が、アンリミテッドのウェブサイトで見ることができます。その中でジェスが、自分がアンリミテッドで支援されて、粗末なビスケットからどう変化し成長してきたかを語っています。作品をつくるにあたって、「障害のある人と、障害のない一般の文化セクターの人の両方からサポートを受けたことが嬉しかった。自分はアーティストとして尊重されている、表現活動でもっと冒険していいのだと勇気づけられた。」というコメントが、非常に印象に残りました。「大変な本数の公演を打って国内外ツアーをしたので、かなりのギャラが手に入り、念願だった自分に扱いやすい特別仕様のバンを手に入れることができた」と言っています。

続いて、リー・リドリーの「ロスト・ボイス・ガイ・ディスアビリティ・フォー・ダース」(声を失った男、のろまのための障害)です。リーは脳性麻痺のコメディアンで、BBCのニュー・コメディ・アワードで優勝しています。作品は、あなたは本当に話すことができないのか、悪魔払いをしたほうが良いのではないか、どんな性生活を送っているのかといった、彼が実際によく聞かれる質問に自ら答えるという、ワンマンショー的な作品です。（映像）人の声なのか、機械音声なのかわかりませんが、リー自身はしゃべっていません。反応がとてもよくて、客席で笑いが続いていました。

次が、ジャック・ディーンの「グランダッド・アンド・ザ・マシン」（おじいちゃんと機械）です。スチーム・パンクというSFのサブジャンルの世界観をもとにして、混乱に陥った国を救うために、100歳の機械のモンスターに乗って、スパナの扱いの上手

だったおじいちゃんを探しに行くという、大人のためのファンタジーです。出演者は人形とジャック・ディーン、生演奏のミュージシャンの数人しか出てきません。50人ほどの小さなスタジオで上演されましたが、これもクオリティの高い作品でした。彼の障害は精神系のようなのですが、詳しくはわかりません。

ベッキ・ペリマンの「ドアウェイズ・プロジェクト」(戸ロプロジェクト)は、作家自身が体験した路上生活を描写したサウンドインスタレーションです。ロイヤル・フェスティバル・ホールの周辺にスピーカーが設置されて、ホームレスのモノローグが流れる作品です。

シヨーン・ゴールドソープの「1100万の理由」は、ピープル・ダンシングというコミュニティダンスの団体の協力を得て制作された作品です。「赤い靴」のバレエ、ミュージカル「シカゴ」など有名な映画のダンスシーンを、聞こえない、ないしは障害のあるダンサーによって再創造した写真作品です。サウスバンク・センターのロビーで展示しました。聞こえない、あるいは障害のある人々が踊るエネルギー、創造力、多様性を祝福する、彼らが踊ることに対する視線を変えることを目的にした作品群でした。

日本からも「アトリエコーナス」という大阪にある知的障害者の生活介護施設から、アウトサイダー・アート作品が招聘されました。去年、アンリミテッドのプロデューサーのジョー・ヴェレントが来日した際にアトリエコーナスを訪れて、作品のクオリティに感銘を受けたことが招聘につながったようです。既存の音楽スコアを直感的に再創造した西岡弘治さん、最近残念ながら亡くなった大川誠さん、女性の容姿や服飾に強い関心を持つ植野康幸さんの3人の作品です。ジョーは「日本のアウトサイダー・アートやアール・ブリュットは非常に水準が高い。しかも作品を商品化し流通させて、アーティストの収入につなげるという試みは英国より進んでいる。日本の強みだ」と言っていました。

「オスカ・ブライト短編映画祭」も開催されました。学習障害、知的障害のある人々によって制作された短編映画の国際的なフェスティバルで、各国を巡演しているようです。アニメーションと音楽ビデオ作品の上映会もありました。

「ビューティフル・オクトパス・クラブ」はアンリミテッドではなく、サウスバンク・センターが以前から主催していたプログラムだそうです。知的障害のある人に芸術活動への参加や才能を伸ばす機会を提供する、ハート・アンド・ソウルという設立30周年を迎えるチャリティー団体、日本で言うNPO団体が運営する無料イベントが、オーブ

ンスペースで同時開催されていました。(映像) これは「ハート・アンド・ソウル・クワイアー」という、障害のある人、子どもから大人まで、いろいろな民族の人々の混声合唱団のコンサートです。

次は、もう少しコミュニティベースで裾野を広げる活動、「アンリミテッド・インクルーシブ・ユース・ダンス・プラットフォーム」です。サウスバンク・センターが主導して開催したダンス・イベントで、英国各地の若手のインクルーシブ・カンパニーが自分たちの作品を次々と披露します。カンドゥーコというプロフェッショナルなインクルーシブ・ダンスカンパニーが、若手育成で指導しているユースチーム「カンドゥ2」が、10団体のトリとして発表しました。(映像)

「インクルーシブ・ユース・ダンス・プラットフォーム」の開催に向けて、「アンリミテッド・フェスティバル・メーカーズ」という人材育成プログラムも実施されました。プロデューサーを目指す18歳から30歳までの障害がある、聞こえない、ないしは病気とともに生きる若者12名が、プロのプロデューサーについて一緒に働き、予算管理、スケジューリングなど制作者の仕事を実地で学んで、このイベントに参加したダンスチームをプロデュースしたのだそうです。アーティストだけでなく、障害のあるプロデューサーも育成するプログラムもあることに、感心するばかりでした。

(5) フェスティバルにおける鑑賞支援

情報保障の取り組みとしては、目の見えない方のために演劇公演にヘッドセットの音声解説をつける、その音声解説の創造的なアプローチについて議論を深めるといったことは、英国ではすでに一般的なようです。今回はさらに踏み込んで、音声解説をパフォーマンスとして組み込んでしまう試みなど、先進事例が紹介されていました。

2012年にアンリミテッドを開催してから、サウスバンク・センターではアクセス面で大幅な向上が図られたそうです。劇場スタッフに意識改革が起きて、会場に来るまでと、入り口から劇場、ライブラリー、ギャラリーなど各スペースへの行き方を一覧にしたアクセスマップを作って無料で配布しています。またチケットセンターとは別に、誰でも気楽に立ち寄って対面で相談できるインフォメーション・デスクが設置されました。手話のできる人がいる時間帯もあります。

アシステッド・イベント（支援のあるイベント）として、鑑賞のためのアクセス情報がガイドブックに掲載されています。アンリミテッド以外の公演も含めて、英語の手話

通訳、字幕、音声言語の文字化などの支援が、マークで示されています。「RP」とはリラクソド・パフォーマンス。声を出したり、騒いだり、動き回ったりしてもいいということで、自閉症など心身の障害があって、じっと見てられない人たちが家族や友人達と心おきなく鑑賞できる公演のことです。「AD」はオーディオ・ディスクリプション、音声解説つきの公演です。タッチツアーは、開演前に舞台上がり舞台セットや小道具を触ったりできる、目の見えない方向けのサービスです。出演者やスタッフに作品について直接質問して、答えてもらうサービスもあります。

手話通訳者も役者でした。(映像) これは「ビューティフル・オクトパス・クラブ」のイベントの1つですが、ミュージシャンが演奏している前で手話通訳者が歌詞を通訳しています。ミュージシャンを見ていいのか、手話通訳さんを見ていいのかわからなくなるほど表現力豊かで、ずっと見ていたくなるチャーミングな通訳でした。

(館内エレベーターの映像) (英語で「レベル5」「レベル4」との音声)「5階です」「4階です」と言っています。階が上がると音程も上がります。音程が下がれば「レベル1」だという訳です。英国のマーティン・クリードというアーティストのサウンド・インスタレーションなのですが、視覚障害者にとっての音声ガイドにもなっています。とても奇妙な音声なので、エレベーターに乗り合わせた見ず知らずの人と目を見合わせたり、「何ですかね、これ」と会話が始まったりするコミュニケーション・アートでもあります。いろいろなアクセス・サービスにクリエイティブに取り組んでいるということに感心しました。

近隣の劇場にも影響が出ています。ナショナル・シアターでは半年に1度、「アクセス」という冊子を作成しています。字幕がつく日、音声解説がある日、タッチツアーがある日などが演目ごとに記されていて、むこう半年間の公演のアクセスサポートを一覧できます。

(6) フェスティバルの周辺状況、運営体制

アンリミテッド以外の話になりますが、カンドゥーコと並んで有名な「ストップギャップ・ダンス・カンパニー」が、2017年2月からツアーを行う新作を制作中でした。ブリティッシュ・カウンシルの派遣団が来るというので、ロンドンから少し離れたサリー大学構内でショーケースをしてくれました。これも、とてもよくできた作品でした。

(映像) 今回初めて、演劇的な作品に取り組んだそうです。妻を亡くした男性、彼には

下半身がないのですが、娘と残された居間で悲しみに暮れ、妄想にふけるという設定です。娘役ダンサーにはダウン症がありますが、ダンス教室で指導して生計を立てているそうです。出演者8人ぐらいが群舞で突然踊り始めるシーンは、ダイナミックで目を奪われました。ダンスカンパニーの本領発揮といったシーンもあって、完成が楽しみな作品でした。

アンリミテッドの運営は、1976年に設立された「シェイプアーツ」という、障害のある人々の文化へのアクセス向上に取り組む中間支援組織と、2013年からは「アーツアドミン」というアーティストの中間支援団体が担っています。聴覚と身体に障害のあるジョー・ヴェレントがシニアプロデューサーとしてかかわっています。シェイプアーツの代表トニー・ヒルトンのレクチャーによると、英国の障害者の活動は「ソーシャルモデル」という考え方に支えられているそうです。1972年に結成されたUPIAS（隔離に反対する身体障害者連盟）という組織が提唱した考え方です。障害が、個人あるいは医療に責を帰するものとされていたのに対して、課題は社会の側にあると70年代後半に提唱しました。心身の機能的な障害は「インペアメント」と言い、「ディスアビリティ」は、障害のある人を社会活動の主流へ参加することから排除している社会の側に起因する、活動の制限や不利益のことであるとして、言葉を使い分けています。障害のある芸術家は「ディスエイブルド・アーティスト」と呼ばれますが、最近、この考え方にも変化が見られます。「ディスアビリティ」にはどうしてもネガティブな語感があり、能力がない、奪われているといったニュアンスが含まれますが、そうではなくて一人一人がいろいろな能力の持ち主「ミックスド・アビリティ」であるという考え方に変化してきているそうです。劇場やさまざまな団体が企画するプログラムも、「スペシャル・プログラム・フォー・ザ・ディスアビリティ」、障害のある人のための特別プログラムではなく、「プログラム・フォー・ザ・ミックスド・アビリティ」、いろいろな能力の人のためのプログラムと、呼び名を変えつつあります。アンリミテッドではまだ「ミックスド・アビリティ」という言葉を使っていませんが、他のアートシーンではそうした考え方も出てきているようです。

その一例と言えるかもしれませんが、「サドラーズ・ウェルズ」という英国を代表するダンスの拠点劇場のラーニング・プログラム担当者に面会する機会がありましたので、ご紹介します。ラーニング・プログラムとは「学ぶプログラム」、日本で言う教育普及事業、アウトリーチのことです。以前はエデュケーション・プログラム（教育プログラ

ム)と呼ばれていましたが、ここ数年で、持っている者が教えるとか与えるということではなく、一人一人の能力を引き出す、学ぶ側が主体的に獲得していくことを重視する価値観への転換が起こっているそうです。サドラーズ・ウェルズで実施した「ホームグラウンド」というプログラムは、さまざまなコミュニティが「サッカー」をテーマに6か月間ほどのワークショップを行い、最後に全てのパフォーマンスを統合してサドラーズウェルズのメインステージで発表します。例えば、ダンス経験者と未経験者20数名が混ざった高齢者のグループは金曜の午前中2時間稽古をし、若者のグループは土日に劇場に集まって稽古をします。ミックスド・コミュニティ・グループには、知的障害のある人、移民や難民を含むエスニック・マイノリティーなどいろいろなバックグラウンドの、幅広い年齢の人たちが集まっています。参加者は総勢100人、事業予算は1,500万円程だそうです。実際の地域のサッカークラブの子ども達もダンスの練習をして、一緒に作品を上演するということでした。このスキームでのプロジェクトは2回目で、1回目はストラヴィンスキーの「春の祭典」を踊ったそうです。出演者の達成感、高揚感、エンパワーの効果が大きかったため劇場の理解が得られ、今も継続しているとのことです。

(7) ジョー・ヴェレントのコメント

アンリミテッドのシニアプロデューサーであるジョー・ヴェレント氏に、日本からの視察団でインタビューを行いました。アンリミテッド・プログラムは2009年に開始したと冒頭で申し上げましたが、実は2005年ぐらいから、障害のあるアーティストを国際的な舞台に押し上げるための資金提供と、さまざまなトレーニング機会の提供が重ねられて、アーティストのスキルアップが図られたそうです。2012年まで8年の準備期間をかけて、オリンピック開催年にアンリミテッド・フェスティバルとして結実したのです。アーティストをセレクトして彼らの創造活動を支援することだけでは決して成功しない。インフラとアクセスの整備が必要だと強調していました。メディアの取り上げられ方も重要で、メディアは障害や悲劇性に注目しがちですが、プロフェッショナルなアーティストを目指すプロジェクトであり、作品について報道してもらいたいと繰り返し説明したそうです。最も重要なのは、障害のあるアーティスト自身が自信をつけること。メディアに対して自信を持って自分達のストーリーを語れるよう、精神面のトレーニングにもかなり時間をかけたと言います。

「アンリミテッドの成果を現時点でどのように捉えているか」という質問には、「将来的かつ理想的には、アンリミテッドは存在するべきものではないし、障害者に対する差別がなくなったわけでもない。成果を証明するのは難しい」と前置きして、幾つかのエピソードを紹介してくれました。例えば、それまでは皆福祉サポートで生活していたが、今は4人がフルタイムでアーティスト活動に専念している。それまでは地方の小さな会場で作品を発表していたが、国際的なフェスティバルに出演するようになった、チケットが売り切れるようになった、などです。ソフト面の変化としては、アーツカウンシル・イングランドが情報提供や助成申請の方式に、アンリミテッドのアクセシブルな方法を導入するようになったことを挙げていました。

「日本とイギリスで状況が大きく異なるが、支援機関は何をすべきか」という質問には、「ハイレベルな活動をしているアーティストと組むこと」、「裾野を広げアーティスト人口を増やしていくために、どこにどんな才能や可能性を持つ障害者がいるかの基礎調査を行うこと」、「表現活動の入り口となるようなプログラムを数多く行って、どんなサポートや巻き込み方をすればよいのか、具体的な手法を考案していくこと」と答えてくれました。

「日本の場合はテクノロジーやデジタル技術を活用することで活動をパワーアップできる」、「物語、ストーリーを大切に、どんな物語があって何を目指しているのか、何を実現したいのかをよく考える必要がある」とも語っていました。

(8) 所感

日本社会における障害者芸術の位置づけが必要と言っても、それ以前に、舞台芸術そのものが、果たして日本社会にきちんと位置づけられているのかという問題があります。仮にそこが十分でないのであれば、その状況を踏まえて、障害のある人たちのパフォーマンス・アーツを社会に位置づけていく方法を考えなければなりません。ジェニー・シレーイ氏は、ロンドンのパラリンピック開会式の共同演出を務めた、グレイアイ・シアター・カンパニーという障害者劇団を率いる人物です。自身も障害者である彼女が「障害者芸術を推進することが目的ではない。その先にいろいろな思いがある」と言います。日本独自の状況として、少子高齢化、若者の閉塞感、価値の均質化、異質なものを排除する傾向、外国人排斥、弱者切り捨てなど、さまざまな課題が噴出している中で、何を目的にこういった活動をするのか、今一度考える必要があると思います。ただ単に、2

020年にオリンピック・パラリンピックが来るからということではなく、それ以上のことを考えていかななくてはなりません。ロンドン・パラリンピックの開会式でホーキング博士は「我々はみな違っている。そして、同じ人間の精神を分かち合っている」とスピーチしました。新しい価値観を獲得していくことも含め、いろいろと考えた1週間でした。以上で視察報告を終わります。

3. 意見交換

(1) 支援・振興の形

伊地知：芸術団体に対するコミッション、いわゆる制作委嘱という形がありがたいと思います。経費の何分の1かの助成という支援が一般的ですが、入場者収入や企業協賛で不足経費をカバーするのはとても難しく、赤字にしないためにどうすればいいかと絶えず頭を悩ませています。日本でもアンリミテッドの組織にかわるものができて、プロデューサーなりディレクターなりが、自分が良いと思う団体に作品制作を委嘱する形になればと思います。

秋元：イギリスに比べて日本の舞台芸術界にはコミッションという形が浸透していません。まず、舞台芸術界がコミッション形式を広げるためのネットワークをつくって、定着させる方法を考えていく必要もあると思います。

伊地知：確かに、全国の劇場やフェスティバルがコミッションしていく文化が必要です。地域創造で、幾つかの劇場が共同でアーティストに新作制作を頼むという形をとっていますが、かなりエスタブリッシュされた団体またはアーティストしか対象になっていません。もう少し対象が広がると良いと思います。

小野寺：ネットワークをつくるのが先という指摘がありましたが、ネットワークとは具体的にどのようなものでしょうか。

秋元：あまり明確に表現できませんが、舞台芸術のフェスティバルの場で話題に上げていくといったことでしょうか。舞台芸術全体を考えるプラットフォームがあるのかという大きな話になってしまって、問題解決にならないかもしれませんが。

廣川：文化庁にはトップレベルから一般の劇団に対するものまでさまざまな助成金がありますが、障害関係の団体に対する枠は特にはありません。日本ろう者劇団は毎年、文化庁に助成申請をされていて、手話狂言はほぼ採用されますが、視覚演劇は最近は助成を受けられず、苦しい状況になっています。全国の障害関係の芸術団体も、自分たちの持

ち出しで作品をつくり、お手伝いしてくださる人もボランティアという形です。これではクオリティの高い作品を作り続ける意欲を保つのが難しいと思います。文化庁とは別の助成制度をつくっていただければと思います。

厚生労働省は来年度、NPO法人、社会福祉法人などを各県で1つずつ選んで、そこに美術活動の支援をするということですが、美術だけではなく、実演の部分も含めた表現活動も選んでいただきたいと思います。

佐野：前回、芸術文化振興会の中山夏織さんから、文化庁の助成で障害者の美術活動が対象になった背景には、関係団体による長年の熱心な陳情、ロビー活動があったとのこと発言がありました。障害のある人の美術は既にかかなり可視化されているけれども、パフォーマンス・アーツはあまり認知されていないという状況があるのかもしれませんが。

小池：イギリスと同じようにフランスでも1980年代に演劇が盛んになりました。ろう者のアイデンティティを示すベクトルとなった、ろう者が自立するための大きな役割を果たしてきたと言われていています。日本でも80年代にろう者の演劇活動が活発になり、小さいグループも入ると全国で数十団体のろう者劇団があります。ろう者自身が演技に自信を持つまでになりました。そうした事実を公に知らせる作業を当事者たちが熱心にやってこなかったということはあるかもしれませんが、こうした場で横のつながりを持って、ぜひろう者の演劇を認知していただきたいと思っています。

(2) ネットワーキング、新しい方向性

萩原：2020年とその先に向けた大きな流れのなか、リーディング・プロジェクトとしてTURNと東京キャラバンがあるのに、障害関係のパフォーマンス・アーツ系のプロジェクトはありません。こうやって集まって話をしているのは、皆がそれぞれ何か役割を持ってプロジェクトを立ち上げて、そこにお金を出すことを目指しているのですか。それとも、ある団体への助成の形をとって、まとまってリーディング・プロジェクト化を目指すのでしょうか。

石綿：この研究会は基本的に、情報交換の場をつくらうと始まりました。

佐野：あとはネットワーキングです。

石綿：オリンピックに関しては、助成ないしは委託という形で各団体の活動をサポートするのが現実的な路線です。まだ計画段階ですが、障害者の活動に限らず、いろいろな新しい表現活動の公募事業を予定しています。この会で何か企画を立ててそこに応募し

てもらって、プロジェクトにしていく可能性もあります。

杉谷：社会支援の助成制度をもう少しレベルアップして予算を増やす方向へ持っていきたいというのも、この研究会の目的の1つです。コミッション形式の公募事業も、助成事業からもう少し前進させていく具体的な目標として、考えています。

佐野：各団体の活動を継続・発展させるため、また制度を活用していただけるように情報提供すること、いろいろなアイデアやご意見を聞かせていただくことも目的です。情報交換を進める中で、複数の団体が同じ目標を共有できるのであれば、個々の活動の延長としては取り組みにくい新たな展開を探っていただいて、新しいプログラムに申請していただくなどの可能性もあるでしょう。こちらから何かを提案して働きかけるより、皆さんがどうしていきたいかが一番重要だと思います。忌憚のないご意見、希望、夢を語っていただいて、スキームの希望などについても話し合えると良いと考えています。

伊地知：せっかくこれだけのネットワークができたので、アイデアを出し合って何らかの形で一緒に活動できないでしょうか。全国公立文化施設協会（公文協）には全国3,000の施設が加盟していますが、催し物の企画について案内を送っても無反応です。団体の存在自体をご存知ない文化施設が圧倒的に多いのです。ですから例えば、公文協の全国大会のプログラムに、障害のある人の活動に関するシンポジウム分科会を入れることができないでしょうか。地域創造の催しの中にも入っていけるかもしれません。

厚生労働省や文化庁に2～3団体で一緒に行って、それぞれの団体の活動を知っていただく、モデル事業について、あるいは指導者の育成について要望する、リーディング・カンパニーの公演を見せる、どんな可能性があるのか相談するなどができたらと思います。長年、素晴らしい活動をされている団体も少なくないのですから、大きな組織に対して見える形にしていくための活動が必要だと思います。

井崎：日本ろう者劇団は手話狂言を34年間続けてきましたが、観客のリピーターの比率が高くなっています。全国各地で公演する機会が増えて、新しい方たちにも来ていただけるようアピールしていきたいと思います。また、視覚演劇の方も新しい表現方法が見つかっていますので、もっと広く知っていただきたいと思っています。

小野寺：最初に萩原さんが仰った、この研究会自体の方向性に関する話し合いはとても建設的だと思います。まだご発言のない方も何かあれば、ぜひお願いします。

佐野：オブザーバーの方も、所感等でも結構ですのでぜひご発言ください。

出口：伊地知さんのご発言についてですが、公立文化施設協議会は組織としてはあまり

強くなく、脱退するところも増えています。だいぶ前に、地域活性化の観点から地域創造ができて、ステージラボといった研修事業など、ある程度は基盤整備となるような事業を実施しました。地域創造はフットワークの軽い組織ですので、働きかけていくと良いと思います。文化事業の担当者は文化庁に再々訪れています。やはり人間同士ですので、内情をいろいろとおしゃべりすれば随分違います。日参は、絶対にしたほうが良いと思います。

角南：地域創造は、基本的には文化芸術振興ではなく、文化芸術を通じた地域活性化という名目で事業を展開していますので、文化芸術振興のために何か一緒にしましょうとか、してほしいと正面から話を持って行くと、それは文化庁さんへと言われてしまいます。それぞれの地域で、いろいろな人が幸せを感じて生きていけるようになるための手段の1つとしてのアートという見せ方を、申請書などに具体的に落とし込んでいくことが必要かと思います。

佐野：支援機関それぞれのミッションに則したロジックを考えていく必要があるということかと思います。

(3) アンリミテッド・フェスティバル2016

田中：2007～08年頃、イギリスでアンリミテッドはほとんど知られていませんでした。一般にまで広まっているわけでは決してないということ、常に覚えておかなければと思いました。今回の公演では、客層の違いが印象深く感じられました。「ビスケット」のジェス・トムと「アシスティッド・スイサイド」(安楽死ミュージカル)のリーズ・カーの演目には、普通に劇場に来る層もいましたが、それ以外の演目では、関係者がかなりを占めていたと思います。「ディスアビリティ・アーツ・オンライン」という障害とアートの情報をまとめているサイトの編集者の話では、今回は特にイギリス演劇に寄せようとして作風が偏って、テキストベースの難しい作品が多かったようです。前回や2012年はもう少し幅広く、サーカス的なものやバンド的なものなど、いろいろ取り入れられていましたが、今回はシアター的な演目が多いと感じました。サウスバンク・センターが完全に主催して、プログラミングしていることが原因だろうと、その編集者も言っていました。フェスティバルの見せ方という意味で、イギリスも模索しているのだと思いました。

前回のフェスティバルの評価を行ったか、今回は事後評価をどうするのかとジョーに

聞きましたが、されていないということで、意外に思いました。客層や海外からの訪問者などのデータもないそうです。議論が回っていない中、全力を注いで、あのよう組織立てて見せているのだという印象を受けました。

佐野：アンリミテッドの現状はまだ、障害のあるアーティストをいかに世に打ち出していくかという、アーティスト寄りの事業ですね。

田中：サウスバンク・センターは決してアクセシビリティの良い施設ではありません。東側と西側でエレベーターが別で、例えば東側の3階から西側の3階に行くのに階段を10段ぐらい上がらないと行けないような造りで、車椅子の人には不便です。しかし、人の力でそれをカバーしています。スタッフが「ヒア・トゥ・ヘルプ」と大きく書かれたTシャツを着ていて、少しでも困っている人に「どうしました？」と声をかけていて、感心しました。

倉品：会場がフラットでないと車椅子が入れない、満席にしたら途中で出たい人が困る、遠くからでは表情がわかりにくいなどあって、キャパシティのことがいつも気になります。リズ・カーの「安楽死ミュージカル」のキャパはどのくらいですか。

佐野：500席を超すくらいです。ロイヤル・フェスティバル・ホールの舞台上舞台でした。このホールはキャパが3,000近くもある大ホールですが、正面席はつぶして、客席を背にセットを組み、舞台上の仮設の椅子で見るという構造でした。舞台背面の上部の席にも客を入れていました。

倉品：一番大きいキャパシティの公演では、どうでしたか。

佐野：「ヒム」というシーラ・ヒルの作品は、同じロイヤル・フェスティバル・ホールが会場で、通常の客席でしたが、キャパ3,000なので正直、閑散としてました。

倉品：発表を伺って、自分が障害のある人と演劇をやるという以外に、障害のある若いリーダーを育てていくことが大切だと思いました。福岡でオーディションをした時に16歳の子がたくさん来たのですが、演劇をやりたいという気持ちはあっても、続けていくまでの意思がありません。アーティストとしてモデルとなる人がいないからです。こういう人たちの意識を変えてリーダーを育てることが、私がこれからすべきことなのだと感じています。ろう劇団はたくさんあり、ここにもリーダーの方たちがいらっしゃいます。脳性麻痺で車椅子の方が演劇をしている姿を、彼らに写真で見せてあげたいと思います。次世代を育てていくことが、本当に急務だと思っています。

小池：イギリスのグレイアイはいろいろな障害を持った方が全て参加できる劇団ですが、

フランスの場合は、ろう者劇団です。日本ろう者劇団は障害者演劇としてでなく、通常の演劇をやりたいということで、文化庁やアーツカウンシルにも助成申請しています。採択なさる側では、特にオリパラに向けて、ろう者団体が参加できる演劇なりを求めていますか。

佐野：ジャンルも当然幅広くあっていいわけですし、障害の種別についての方針などはありません。

伊地知：障害のあるアーティストを育てることは本当に必要だと思います。しかし、知的障害ではない、身体障害の方に募集をかける方法がありません。カンドゥーコの芸術監督のアダムに、どうやって障害のあるダンサーを入れたのか尋ねたら、道を歩いている時に車椅子の人にチラシを渡したと言っていました。私も通りがかりの人に名刺を渡して「入りませんか」と言ってみたのですが、「何で車椅子の俺にそんな話をするんだ」と笑われてしまいました。日本にはまだベースがないのです。学習障害の人たちは、メンターがつかないと振付けを覚えるまでに時間がかかります。イギリスのように何十年ものベースがあって、カンパニーがたくさんある中で、知的障害のある人も振付けをやる環境ができてくるのが望ましいと思います。

(4) 参加団体のコメント

佐野：この研究会には、高齢者の活動、障害のあるお子さんに向けての活動をしている団体の皆さんにも参加いただいています。いろいろな構想が広がって、日本にとって必要なビジョンが生まれてくることを願い、幅広く参加いただいています。最後に、いくつかの団体の方からコメントをお願いしたいと思います。

小川：シアタープランニングネットワークは、健常者のチームで作品を創作して、福祉施設に赴いて演劇を見てもらおうのですが、福祉施設に話を持ち掛けてもなかなか伝わりません。アピールの方法が難しいと感じています。この場にはいろいろな団体の方がいらっしゃると思いますが、共通項と相違点を出していかないと、何をアピールするかが外には伝わっていかないのではないかと思います。

遠藤：昨年の全国シニア演劇大会では、シニアの方たちのキラキラとした舞台を高校生に見てもらい、良い作品を選んでもらおうと、ジュニア審査員を設けました。男女5人の高校生が真剣に話し合ってくれたのですが、発表の時に、こんなに勉強になって、こんなに感動する演劇を自分たちはこれまで知らなかった、選ぶなんてとてもできないと、

全員が泣きました。それを見たシニアの劇団の方たちも、若い世代にわかってもらえて嬉しいと、最後は会場中が涙であふれてしまいました。予期せぬ出来事でした。シニアの演劇を若い世代につなげていくために、次に何ができるか考えているところです。

小野寺：森田さんから、今までの話を受けて、あるいはご自身の活動や全体の動きについて、ご意見をいただけるとうれしいです。

森田：倉品さんが仰った障害者のパフォーマー、リーダーの育成について、私もとても必要だと思っているので、自分のことを振り返ってみました。若い子にどこまでできるかわかりませんが、自分の障害をどう捉えるかが大切だと思います。障害をアピールするのではなく、障害を含めた自分の体をどうアピールするか、意識するトレーニングが必要です。体制をつくり、そういうトレーニングを継続的にやっていくことがパフォーマーの育成につながると思います。

澤藤：公共劇場として、公演するだけでなく、演者と制作の間で、また公共ホールの中でハブになれる組織が、理想の劇場だと考えています。役割としての劇場も担っていくということです。障害関係についても、そうした取り組みを今年度少し進めています。皆さんとは違う立場かと思いますが、とりあえず、自分のできることを地道にやっということと改めて感じました。

栗栖：アンリミテッド2016と同じ時期に、リオに行っていました。リオではブリティッシュ・カウンシル・ブラジルがアンリミテッドのレガシーを引き継ぐような活動をしようと、2012年から活発に活動していましたが、途中で資金難などの問題があり、成果を出せたことと出せなかったことがあったようです。オリンピック・パラリンピックの開会式は3時間ほどの長さで、3,000人ほどが出演しますが、大半はボランティアです。ロンドン大会ではそこに多くの障害のある人たちが入っていたことや、ディレクターも障害者だったことが伝説のように語られています。今回のリオでは残念ながら資金難などの影響もあり、その形を引き継ぐことはできませんでした。しかし、2020年は先進国でもあり、東京は2回目のパラリンピック開催地でもあるので、開閉会式にはロンドンのような、またはロンドンを超えるようなセレモニーが求められることになります。おそらく皆さんの出番だろうと思います。

皆さんそれぞれの得意分野を生かしていただいて、プラットフォーム化、ネットワーキング、関係性の強化など、東京を中心に全国規模で協力して進めていくと良いと思います。道端でスカウトでもいいので、人材を発掘し育て、2020年に多くの市民が関

わってつくるセレモニーができたらと思います。2020年に向けてノウハウを蓄積することが、確実に2021年以降のレガシーになります。そこにこそ意味があると思っています。

萩原：この研究会は、障害を持った当事者を交えて話し合えるのがとても良いと思います。まれに見る場所であり、好事例です。これから劇場や行政でいろいろなことに取り組んでいかれる中でも、必ず当事者を入れていただきたいと思います。パフォーマンスする側にとって、また観に来る人たちにとって何が必要なのかを、当事者の意見を聞いて考える場をつくってほしいと思います。

佐野：栗栖さんからプラットフォームについてご指摘がありました。今は、劇場などが障害者対応など施策を考えようとしても、情報を見つけにくい状況があると思います。専門的な協力ができる団体の情報を提供することや、トレーニングや活動の場の拡大について、継続的に考えていくことが必要です。プラットフォームの具体的な形については、これから考えていかなければなりません。次の研究会でどのように話を進めていくか改めて検討したいと思います。皆さんからもご提案いただければと思います。

小野寺：これで終わります。お疲れさまでした。

(了)